綾子の割礼　第一話

魔衣

HinaProject Inc.

【作品タイトル】
綾子の割礼　第一話

【Ｎコード】
Ｎ０１５９Ｂ

【作者名】
魔衣

【あらすじ】
割礼の儀式を受けた女奴隷が始めて割礼というものを知ったときのことを回想する

浴場（前書き）

女性器切除及び奴隷的拘束に反対します。
法律に触れるような事は絶対にしないでください。

浴場

ここは砂漠の国を治める国王の為のハーレム

世界各国から集められた女奴隷達は選りすぐりの美女美少女達である。

彼女達が今一糸纏わぬ姿で歩き回ったり寝そべったりしている。

なぜ彼女達はスッポンポンなのか？

なぜならば、ここはハーレム最大の社交場である大浴場だからだ。

ハーレムのある宮殿は砂漠の中のオアシスに高い塀をきずいて作られているのでけっして脱走できないし、

例え塀を乗り越えたとしても砂漠のど真ん中である。生きて町までたどり着く事はまず出来ない。

そんな女奴隷達の楽しみの一つが大浴場である。彼女達は２４時間何時でもここの湯殿やサウナ等、様々施設を利用できる。

女奴隷達は特別な事があるとき意外服装は自由だ。非常に高温だし異性の目が余り届かないので普段から露出の多い衣装を身に着けている者もいる。そして常に全裸と言ってよいいでたちの者もいる。

だが大半の女は服装に気を使っている。洗脳といえるほどの奴隷調教を受けていても女は女だ。

そんなファッショナブルな女奴隷も風呂に入る時は全裸にならないといけない。

女奴隷たちは“裸”の付き合いをして友情（を通り越して愛情にな

ることも多いが・・・・）を育み辛い奴隷生活としての生活に耐えるのだ。

この物語の主人公である、紫牡丹と呼ばれる三十歳位の日本人の女奴隷は、
三人の実の娘と共に湯浴みを楽しむ事を日課にしている。

母娘４人は、世話係の奴隷の少女達と共に冷たいコーヒーなど飲んでわいわい話し込んでいた。
世話係の奴隷娘達は大半が日本人だが中に2名違う者達がいた。一人はペル○ャ系と思われる金髪碧眼に真っ白い肌の神秘的な美少女と黒髪黒い瞳にミルクチョコレート色の肌をしたア○ビア系の元気そうな女の子だ。
紫牡丹はふと二人に目お向けて言った。
「わたくしが初めて割礼というものがあるのを知ったのは、日本にいたときに、深紫の蝶々、真紅の薔薇、貴方達と一緒にお風呂に入った時でしたね」
そう言って昔自分が綾子と呼ばれていた時の事を思い出した

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
風呂場で彩子と周りのメイドの少女達は驚いていた。理由はしばらく前に夫の実家かから送られてきた
2名の美少女ルーンとラーディアの無毛の性器に割れ目が無かったからだ。
それどころかルーンの股間には大きな深紫色の蝶、ラーディアには真紅の薔薇の刺青が施されていた　。
「貴女達それはいったい？」

〜〜〜
〜〜〜
あの日、彩子はメイドのルーンとラーディアに共に入浴させることにした
ルーンはペ〇シャ美人で白い肌に蒼い瞳、美しい腰まである金髪でどこか神秘的な容姿の１６歳。
ラーディアはア〇ブ系でミルクチョコレート色の肌に黒く艶やかな長い髪、黒い瞳で元気のよい１４歳
2名とも若い娘とは思えないほど出るところは出て、引っ込むところは引っ込んでいた。

この家の風呂は大浴場の他にも女主人専用も、あるにはあるが使われていなかった。
彩子はメイドさん達と一緒に入る方が楽しかったし。何より未亡人となったが亡夫に操をたてており、もう2度と男性に抱かれペニスを膣に受け入れる事はないのだと心に誓っている。
だが女盛りを迎えた綾子の身体は一人寝の寂しさから、自分の夜伽をさせる娘を物色することもかねていた。

そんなか風呂場に来たルーンとラーディアに眼がいった。完全にスッポンポンの彩子
やメイドさん達と違い二人とも身体に大きいバスタオルをまいている。
こういう所にはなれていないのか？やや恥ずかしそうに見えた。
彩子はちょとしたいたずら心を起こした。なにやら近くにいたメイドさん４人の命じていた。

「ルーンさんラーディアさん、よくきてくれましたね」

そうにこやかに話しかけた。
話し込んでいるうちに後ろからメイドさん達がそーとちかずいてき
て。二人のバスタオルと取り去ってしまいました　。
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜

「奥様、わたくし達の大事な所が封鎖されているのはですね、
わが国に5千年以上も前から伝わる、成人女性の証である“割礼
の儀式”を受けたからですわ」
とルーン

とりあえず驚いて立ちすくんでいるだけでは風邪を引きそうなので
風呂から上がり大広間で2人から事情を聞いた。
彩子や一緒に入浴していたメイドは浴衣一枚。ルーン達は布を胸の
前で交差させて首の後ろで結んで乳房を持ち上げ、
申し訳程度の腰布でした。
部屋の周りには屋敷中のメイドが野次馬に来ていた。

「僕達は日本に来るまでは故郷でガーワジをしていたんです」
「ガーワジとは何ですか？それに貴女達は王宮のメイドさんだと紹
介状にはありましたけど？」
と彩子はラーディアにたずねた。
かわりにルーンが言った「昼間はそのとうりですわ、ですが訳あり
ましてお金が必要で、
それで夜はガーワジ、つまり踊り娘をしていました。」
「ルーンさんそれはベリーダンスとかをお見せするんですか？」と
彩子
「はい、踊りといっても衣装など無くティアラやチョーカー、ネッ

クレス、ブレスレット、アンクレット等の装身具だけであとは全裸です。それにお金を貰えば、一晩その方の御寝所で御奉仕もします。」
「そ、そうなの…。それより、な、なんで大事な所を閉じてあるの？それでは殿方を通わせることは出来ませんよ」
彩子の声は妙に興奮していた、呼吸も荒い。顔もまッ赤だ。普段人前で見せる優しく貞淑な若後家様とは違う。
「勿論ガーワジをしていたときは閉じてはいませんでしたわ。日本にいる彩子様のところに行くメイドを決める時、身体検査をしたんです、その時私とその他にも何人かいた同じ夜の仕事をしている娘達は本来閉じていないといけない陰部を裏で医者にてをまわして縫い合わせあったのです。」

メイドさん達はざわざわと騒ぎ出した。
「静かにぃ。それはそうとなぜそのようなことをするのです？なんの意味があるのですか？」
「それはですね、わが国では先代のそして今の旦那様のおかげでだいぶ変わりましたけど、今でも女は結婚するまで純潔を守るのが当然です。そのためには陰門を閉じておくことによりそれを証明するのです。まぁ近代的な首都なら抜け穴はあるにはありますけど。私のいた田舎では完璧に守られています。男の子は精通が来たら、女の子はは初潮が来たら割礼を受ける慣わしです。」
「あの、割礼とは女のあそこを閉じることではないのですか？」
彩子の隣にひかえていたメイド頭の青葉が驚いたような表情で尋ねた
二十歳をすこし出た若さだが１０台の娘が多いので皆のお姉さん役でもある。

ラーディアが青葉に答えた
「うんうんそうじゃないですよ。割礼ってのはさ、男の子はすっぽんぽんで皮を被ったおちんちんの皮を
割礼専門の巫女さん達に引っ張られてそれをちょん切られるだよ。
それでね女の子は男の子と同じでやっぱり、
すっぽんぽんで巫女さんにクリトリスとラビアを切り落とされるの、
その後傷が治ったらあそこを閉じられるの。
それくらい貞操をたいせつにしてるの」
それをきいた青葉はその場で白目をむいて卒倒した。

メイドたちはおのおの顔を見合わせたりして
「うぞ、そんなことするなんて」
「なによそれ、こんな良いもの取るなんて信じられない」
「わ、わたくしも結婚まで処女を護り抜くつもりですが・・・こ、これを取るのは・・・」
「陰核快感無くすなんてあたし達に死ねということと同じよ。」
「そう？あんたさっさと切った方が良いんじゃない。そうすればその淫乱も直るかもよ」
「なによ最近奥さまの夜伽に呼ばれないからって嫉妬してるの？あんたこそ切れば。そうすればオナニー三昧ともおさらばよ」
「あたしルーンさんみたいな人に割礼してもらえたら幸せ…・。」
騒ぎはしばらく続いた。

綾子の割礼　第一話の続き（前書き）

作者は性器切除および奴隷的拘束に強く反対します。

綾子の割礼　第一話の続き

とりあえず彩子はルーンとラーディアにここは日本なので性器を閉ざしておく必要はない
医者であけてもらうように指示を出した。２人はあっさり承諾した。
彩子は少し拍子抜けした。このての伝統文化は他の者が言っても聞き入れてもらえないと思ったからだ。
その後付き添ったメイドから数日入院が必要かもしれないと言う報告が来た。

夜も遅いのでメイド達を下がらせ彩子はほっとしていた。
彼女股間はかなり濡れていた。
姑に奴隷調教をうけマゾにも目覚めている綾子は、陰核切除そして、自分も結婚前ただのメイドだったころ貞操帯をつけていた為に陰門封鎖というもになんともいえない淫靡さを感じてしまったのだ。自分の性器を他人の管理下に置かれるのとても魅力的なことだと綾子は思っている。
あやこは股間にの白魚のような指をあてがい「あぁぁ、わたくしのここを管理してくださいませ。でないとどんどんいやらしい女になってしまいますわ」と呟いた。
そして「もう我慢できませんわ」
仕方が無いので先ほどまでいたさやかというメイドを呼んだ

さやかは１６歳、１６４ｃｍ長い黒髪を首筋で赤いリボンでとめている。剣術で鍛えた身体は引き締まっていた。
気は強いが人の良い優しい娘だ。

「奥様御用でしょうか？」襖を開け顔を真っ赤にした浴衣の娘が三つ指ついていた。
3人並んで寝られるほど広い布団がしいてあり枕が2つ並んでいた。
すでに彩子は全裸で布団にいた。黙って、さやかは立ち上がると、浴衣のおびをほどいて全裸になり、大降りの胸と股間に手を当て彩子の下まで来た。
また布団のそばで正座で三つ指ついて頭を下げた。
さやかは彩子に胸にしなだれかかった。
彩子は彼女を布団に寝かせ口ずけした。
2人の女の切なそうな喘ぎ声が屋敷に響き渡った。

綾子は夫を失ってい以来女性を愛の対象にしている。生涯男は夫唯一人と心に決めているのだ。
防音措置のない家なので他のメイドさん達はたまった物ではない自然と股間に手が伸びる者、隣の布団に潜り込む者が後をたたなかった。ただこの家では彩子の許しのない手淫やメイド同士の性交は表向き禁止されていたが、おおっぴらにしなければ彩子も眼をつぶっていた。

あっ駄目、奥様イクっあぁ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜」
「良いのですぅよ、あっあっあぁう、はぁ〜〜〜」
股間と股間をすり合わせ、本日3回目の絶頂を2人は迎えた。
布団に倒れこむと彩子はさやかを胸元に抱き寄せた。
「ハァハァハァ、とても、可愛かった、ですよ、フゥ」息荒くそう言うとさやかにディープキスをした。
「ア、ありがとうございます。」
しばらく抱き合っていたが汗まみれ気持ち悪いので、シーツをさやが取替えシャワーで汗お流した。
布団に全裸で二人ならんで手を握って横になっていた。二人でシャ

ワーを浴びた時彩子は鼻歌まじりにシャワーを浴びさやかの安産型のお尻のあまりの可愛らしさに、またもやむらむら来て、1回してしまった。
（あたし何してるんだろう？こんな若い娘にいやらしい事して。いくら寂しいとはいえ。ふぅ、あたしがこの娘くらいの時は手淫の存在すら知らなかったのに…）
「どうかなされたのですか奥様」
考え事していた彩子をさやかが心配そうな眼で見ていた。そんなに深刻そうな顔をしていたろうか？

「うん…ぁ、そうね。そうそう今日聞いたルーンさんとラーディアさんの女の子の大切な所を斬る話どう思いますか」
「もう…信じられません、そんな酷い事するなんて！女の子の一番大事な所を何だと思ってるのよ。
あの後インターネットで割礼の事を調べたら国連の人権委員会でも問題になってるそうじゃないですか。
みんなも怒ってましたよ。あっ、それと美希ちゃんがあの2人に何か根掘り葉掘り聞いていました。
それで2人の病院の付き添い、明日から行くそうです。」

「そうなの美希ちゃん偉いわね…」そう言ったあと彩子は何かひっかかっていたの思い出した。
「さやかさん、美希ちゃんさっき、『あたしルーンさんみたいな人に割礼してもらえたら幸せ…・』とか言ってなかった？」
「そうなんですか？あの娘も変な娘だからなぁ、ちょとその気になちゃたのかな？
まぁ、でもルーンさんとラーディアには可愛そうですけど、みほと（陰核の雅語）を切り落としたら、あの快感とはもう無縁なんでしょ。でも私達が割礼されるなんてありえませんしね」
「そうね、（美希ちゃんは、まぁ変な事にはならなでしょう）こん

な気持ちのいい事とさよならする気にはなれませんね。
貴女を初めてここに呼んだ時、始はあんなに嫌がっていたのに今はこんなに
可愛くなったんですもの」
そういうと彩子はいきなりさやかにの両脚を割ってのしかかり、股間と股間をくっつけた。
「あぁ、奥様駄目です、あたしもう体力ありません…あぁぁ。」
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
翌朝彩子は自分で着物を着て、いまだ布団の中で寝ているさやかをゆすって起こした
「起きなさい、さやかさん、もう他の娘たちは起きてお仕事をしたり学校へ行く準備をしていますよ！」
「ほぇ、……・あうっ、…・あっ！。」
さやかはがばっと布団をめくり裸のまま土下座をした。
「申し訳ありません奥様より遅くまで寝ているなんて、お許しください」
「うふっ、そうねそんな悪い娘には御仕置きが必要ですね、お尻こっちにおむけなさい。そう言うとさやかは奥様に尻を向けた。
そこに彩子の平手打ちがはいった。
パチーン「いったーい」思わず眼が潤んだ。
「さやかさん御仕置きを始めましょうか。」
「へっ？お尻叩きがお仕置きではないのですか………？
嫌ぁ、まさかアレですか？お願いです、嫌ぁ〜〜〜アレだけは許して〜〜〜」
そう言ってさやかはあとずさった
そういっているうちにメイドさんが５人ほど入ってきた。
５人共さやかが昨晩奥様に可愛がられた事で嫉妬のこもった目で彼女を見ていた。
５人はスッポンポンの寝ぼ助メイドを押さえつけるた。

彩子の手には白いケブラー製の貞操帯が握られていた
「大丈夫よ、１週間で外してあげますから、それにルーンさん達みたいにみほと（陰核の雅語）とってしまうよりはいいですよ。」
彼女の永久脱毛処理されたばかりの股間に貞操帯がはめられ、カチャリ。彩子は無慈悲にも鍵をかけた。　さやこの悲痛な叫び声が響き渡る。
「奥様ぁぁ、酷いですぅ、こんなのが学校でばれたらあたし変態さんあつかいですよぉ！」
「だいじょぶですよ！体育の時間は長いズボンを穿いておけば解りませんよ。」
「そんな〜〜それに、あたし１週間も我慢できませんよ。」
「頑張りなさい。それも修行です。」

「そんなーー」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
そして再び砂漠のハーレムの湯殿
全裸のまま綾子は言う
「あの時は割礼など自分には無関係だと思ておりましたが、まさか私たち全員が割礼の儀式受けさせられてしまうなんてしかも後宮の女奴隷なんて。」
そうは言うが
クリトリスと自由を失いはしたが世俗社会とほとんど隔絶した小さな世界で３人の娘と愛する女性達と共に穏やかに暮らせる今はそれなりに幸せなんかもと思う。

語られる割礼（前書き）

ルーンが下半身丸出しでメイドさん達に自分が陰核切除をされた時の話をスル話です

第2話　ルーンとラーディアの割礼

ルーンとラーディアの陰部開放の手術を終え傷が完治して屋敷に帰ってきた。
そこで恐るべき割礼手術の事をが彩子達知ることになった。
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜

彩子が美希と共に2名の帰ってきたことを聞いたのは午後3時ごろ
自宅の温水プールでの事だ。
彼女は一糸纏わぬ全裸で平泳ぎをしていた。
報告を受けた彩子は青葉に
「そう、解りました。
そうね今晩貴女はルーンさんとラーディアさんそれに美希ちゃんを連れてあたくしの部屋に来てください」

そういうと彩子は全裸のまま風呂場へといった。
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜

「ただいまー」
可愛らしい声が使用人用の玄関に響いた
ツインテールの栗色の髪で小柄な少女がルーンとラーディアをつれて入ってきた。
そうすると待ち構えていたのか住み込みのメイドさん達が
大部屋に3人を連れて行き、学校から帰ってきた行儀見習いの娘達

も制服のセーラー服も
着替えずにいるものも居て、そこはまるで記者会見場の様であった。

しーんと静まり返ったなか
「あの………、質問があるのですがよろしいでしょうか？」
皆を代表して、消え入りそうな声で着物の娘が尋ねた。
ロングストレートの髪に雪のように白い肌、まるで京人形の様な少女だ。
彩子のもとに預けられている恵美さん（１８歳）である。

「お、お二人の…その…あの」
何やらもじもじしている
「恵美ぃ何してるのよ！あたしが聞こうか？」
とやかましい事で有名な由香里が恵美の着物の裾を引っ張りながら小声でいった。
「いえぇ、大丈夫、です。………。あの、お二人の、女の子の一番大事な所には『あれ』が無いそうですが本当なのでしょうか？」

「あれってなに？」
ラーディアはちょと意地悪していってみた。
「あっ！あの、その……ごめんなさい………。」

「いいのいいの別に、皆にも聞かれると思ってたもん。
要するに僕達のおまんこ、にクリトリスとラビアが本当に無いのか知りたいんでしょ？いいよ見せてあげる。
いいですよねルーン様」

そういうと立ち上がり、私服のミニのスカートをめっくくたそこには

可愛らしいパンティがあった。
「あっ、いけませんわ、今までパンティなんてほとんど穿いたことがありませんので。今脱ぎますわね。」

そういうと2人はスカートの中に手をいれパンティを脱いで素足から抜き取った。そしてスカートの留め金とベルトはずした。
ストンとスカートが畳に落ちた。そればかりではない着ていたものを全部脱いで生まれたままの姿になったそして肩幅より脚を開きメイドたちをラーディアはいたずら小僧の様に、ルーンは艶ぽくと見た。
性の奴隷として激しく使い込まれた性器が隠さず丸見えになっている。
両手の指で押し広げられた、そこには確かに大陰唇の割れ目間に陰核も小陰唇間無く、ただのぽっかりした穴がある。
そのせいかなんとなくすっきりした印象の女性自身にルーンは蝶の、ラーディアは紅い薔薇の刺青がされている。

蜂の巣を突いた様な騒ぎになった。小一時間ばかり騒いだあとようやく静かになった。
「それ、どうやって斬ったの？」

「性感鈍くなるの？」

「やっぱり凄く痛いの」

質問攻めにあっていた

やや困ったような顔でルーンは
「では割礼の事を順番をおってお話しますわね。」

「おっ、お願いします。」
と恵美ゴクリと息を呑んだ

（ルーン以下ル）
「割礼でクリトリスとラビアを切り取って陰門を閉じるのは、女は性の喜びを知ってはならない。　という伝統的な考えと衛生上の理由です。
都会では日本とそんな変わらない暮らしになりましたが田舎や遊牧民たちは水が無くてあそこを清潔にしにくいので病気予防の為
そしてわが国では一夫多妻なので女が性の喜びを知ったら何人もの女を満足させるのは難しいでしょ？
殿方を満足させて子供を生めればいいのです。それに性の喜びを知らなければ浮気などしないと言うこともあります。」

（ラーディア以下ラ）
「都会では定住する人も増えたけど。、　砂漠で遊牧していたり厳しい自然の中で生活してるの。
だから性交は殆ど排泄行為に近かったんだ。」

ル
「砂漠でのテント暮らしでは自然との闘いです。　本当に最低限の事しか出来ません。
だから女に割礼を施したのでしょう。
やはり砂漠の生活の必然性から生まれた割礼という習慣は砂漠に生きるものの生活の知恵です。
ですから私は今でも割礼を受けた事を誇りに思っています」

ラ
「それにね割礼してないと絶対に結婚できないんだよ。
王都でガーワジしていた時もね東ヨーロッパから来ていた娘達が何
人かいてね、
ベリーダンスはすぐに上手くなってあそこの毛とか抜いたりしてな
じもうとしたけど、
始はクリトリスつけてたから、気持ち悪がられてお客さんつかなか
ったよ。
でもお店の方でも困って割礼をさせたの最初は嫌がっていたけど自
分から進んで割礼を受けたみたいだよ。」

この時ラーディアは嘘を言った。彼女達は自分からしたのではなく。
強制的に割礼を施されたのだ。彩子とここにいるメイド達も同様に
強制的に割礼を施される事になるのだが。

話はそれるがこの2年後、恵美は割礼を受けた時、
皆が泣き叫ぶなか彼女は涙こそ流したが歯を食いしばり悲鳴を上げ
ることなく儀式を終えた数少ない一人なのだ
20歳で割礼を司る巫女になり日本に割礼を持ち込んだ一人である。

「ねぇねぇ、あたしラーディアさんから割礼の儀式の話聞いたんだ
よ」
と美希が言ってきた
(ル)
「それではお話しします。私の部族での割礼はこうでした」

その半年間に精通、初潮を迎えた少年・少女達は満月の晩に集められ成人の儀式として割礼を施される。
ルーンは１２歳になったばかりだった

割礼にはそんなに時間はかからない、さくさく進む。少ない人数でかなりの人数の割礼をしないといけないのだ
少年少女は全裸にされる。
そして少年達はペニスの皮をめくられ初めて外気に晒されたであろう亀頭と周辺を綺麗に消毒される。
陰毛が有る場合抜かれる。少女達も同様だ。性器を丁寧に洗浄消毒される。
クリトリスを包む皮を捲り肉粒そしてビラビラを満遍なく消毒してやる、
全員それが最後の陰核快感である。
ただルーンの様に影で手淫をする破廉恥な娘も何人かいたので最初では無い者もいた。
ただばれたら焼けた鉄の棒を膣につきいれられる罰が待っているので用心している、もっとも現行犯でなければ問題ないレベルだが…

満月と幾つもの篝火の明かり中で
まず少年達からおこなわれ次に少女達がされる。
儀式をおこなうのは若い奴隷の娘達である彼女達は<割礼を司る巫女>とよばれる
彼女達は一糸纏わぬ全裸である、普段も人前で肌を晒すことはしばしば有るし割礼等の儀式の時はこうするのが伝統である。

寝かされ手足を台の４方に結び付けられ両脚を大きく広げさせられた。

＞寝かされ手足を台の４方に結び付けられ両脚を大きく広げさせられた。
これ書き込みのミスです読まないでください

ここに来た少年少女は誇らしげな顔をしているものもいるにはいるが、たいてい嫌そうな顔をしている。

ある可愛らしい男の子は半べそをかいてガタガタ震えています。
それを１５歳の＜割礼の巫女＞アズイーザは
「男の子なんですから、
おちん○んの皮を切るくらいで泣いてちゃ駄目でしょ。」
といいながら
裸の少年の前に跪くと彼女の目の前には子供と大人の間の微妙な時期にある性器がくる。
普段なら全裸のアズイーザを眼にすれば
勃起したであろう可愛らしい包茎のペニスも割礼の恐怖から、小さくちじこみあがっている。

その完全に先を包み込んだ包皮を左手で器用につまみ引っ張り上げた、まるでニカワのように伸びる、
「さあ、いきますよ、奥歯をしっかり噛み締めて」
右手のメスをあてがうと力を込めて一気に引いた。

ぷっンと糸が切れるような音がした。地面を血液がぬらす。
「ぐぅ！！」
辛うじて悲鳴をこらえた。
包皮を失った少年の亀頭が血にまみれて惨たらしく月光やら篝火に照りかえっていた。
少年は涙を流ししゃくり上げていた。
「もう男の子なんだから泣いちゃ駄目だって、
そんなに泣いてるとおちん○んを取ってしまいますよ」
最後の一人を終えた
。これからは女の子達だ。
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
ルーンはアズイーザに促されおずおずと手術台に上がった
ルーンは寝かされ手足を台の４方に結び付けられ両脚を大きく広げさせられた。
覚悟を決めたつもりでいたが怖くなりルーンは叫んだ。
「アズイーザぁ！お願い、やめてぇ！もうエッチな悪戯しませんから！」
それを
聞いてもなお、アズイーザはルーンの股間にアルコールをかけ始めた。
「わーーー！いやーーー！そんな事したらお仕置きですよぉ！
この間、貴女がそうをして女の大事な所を鞭でオシッコをもらして気絶するまで叩かれるなんて物じゃすませませんよーー。」
大きい涙声でえらい事を話されアズイーザも困り

「おぉ、お嬢様その様なこと人前でおっしゃらないでください（泣き）それに
お嬢様に割礼をして差し上げないともっと酷い御仕置きをされてしまいます。」

「されなさい！貴女、奴隷でしょ！」

このころのルーンは間違っても（たとえ相手が奴隷でも）こんな事を言う娘ではない。割礼の恐怖で錯乱しているのだ。
アズイーザ眼を潤ませ言った
「酷いです、ルーン様！私に不能になれと言うのですか？」
アズイーザは無毛で刺青をされた割礼済みの女性器に両手をあてた
「私まだ１５歳です、もう二度と御寝所で御奉仕の出来ない身体になるのは嫌です
閉じるんじゃないですよ！おまん○を使い物を使い物にならなくされるんですよ
$$$$$$$$$$$や%%%%%%%%%%%%な事されて他にも色々されて、
あげくに！！！！！！！！！！！！！！！！！！！までされるんです。
そんな御仕置きを三日三晩されたら私…グスン」

あまりにやばい発言だと思ってください（泣）

「$$$$$$$$$や%%%%%%%%、揚句に！！！！！！！！ですって？」

ルーンも顔を青くしている。

「どの道割礼は避けられないですし、しないと絶対結婚できませんから、始めますね」
アズイーザはどこか疲れたように言った
「それでも嫌だーー、貴女の生殖能力より私のクリ〇リスの方が大事よ（涙）」

もうとめても駄目な事は分かっていたが叫ばずにはいられない。
ルーンは舌を噛まないように布を無理やり口に押し込められた
ルーンはガタガタ震えていた。涙を滝のように流していた
アズイーザは糸に針をとうしたものを取り出しルーンのクリトリスに突き刺した。
言葉にならない悲鳴をあげて手足を必死にばたつかせているがしっかり固定されているのでどうにもならない。
針で糸を通すと針を取り、しまった。
右のラビアを強くひっぱりメスをあてがい丁寧に切っていく

ビラビラした肉が少しずつ性器から離れていく

手早く、左右のラビアをきり終えたアズイーザはルーンに
「お嬢様これより陰核を御斬りします、お覚悟を！」

といい先ほど陰核に通した糸を引っ張り上げた。
一説によると中東系の女性は日本人に比べると陰核が大きく敏感だといわれる
ルーンの陰核はその中でも特に大きい方に分類される。
アズイーザは何度かこの少女の陰核に舌と唇で奉仕した事がありこれお別れとは少し寂しい気もしたが

愛しい女主人の将来の為になることが出来るのでしあわせだった。
割礼の痛みを恐れる少女はいるが割礼事態は悦んで受ける物である。
アズイーザは割礼の前に奴隷になった
そのため危うく割礼が受けられないところだったが。ルーンの祖父の慈悲深い配慮のおかげで陰核とラビアを切り取ってもらえた。
割礼を許されないのは女として最大の屈辱だった。陰核と小陰唇をつけているなら死んだ方がマシだとアズイーザは思っていた。

後に彩子とメイド達に割礼した者達は善意からしたのかもしれない
「こんな若いご婦人が陰核をつけているなんて」
「可哀想に、愛らしいこのメイドさん達は割礼を受けられないなんて（涙）」

そういうカルチャーギャップがあったのかもしれない（作者はまだ何も考えていない）
そんな陰核が強く引っ張れその痛みに
「うごぉっ」
彼女は眼を見開き、うめいた。
アズイーザはその引っ張り上げられて伸びきった。
人に隠れて1日1回はする手淫で敏感になった性感帯にメスを入れていった。
（嫌だ、こんな気持ちのいい所を取られるなんて、1日の最後の楽しみがなくなるなんて。）
ばれたら性器をつかいものにならなくされる恐怖感と部族の性道徳に反している背徳観で毎晩、自慰に耽っていた。
今のルーンは誇りより痛みと恐怖が先にたっている。
少しずつ余計なところを傷つけないように丁寧に切れ込みを入れていく。

やろうと思えば一気に斬る事も出来るのだがそうは問屋が卸さない。
身分の高い少年・少女ほど割礼の痛みは大きくなっていく。少しず
つ神経をえぐるような切込みを入れていく。
ルーンはというと１２歳の少女が耐えられる痛みの限界は当に過ぎ
ていた。
彼女の脳はこの痛みと現実から逃れる為に所謂、脳内麻薬を大量に
だしていた
ルーンの顔は先ほどまでの恐怖と苦痛で歪んだ物ではなく
惚けたような虚ろなそれでいて気持ちのよさそうなものになってい
た。
「あはぁぁん、なんだか気持ちいぃわぁ。」

そんな夢心地も長くはなくアズイーザは神経数本程度まで肉を削り
そこに糸を巻きつけていきました。
そして目配せして近くのやはり全裸の割礼の巫女の娘とともに力任
せに糸を引っ張ったのです。

ヴッチン！！

音がした直後。ルーンからこの世のものとは思えない悲鳴が聞こえ
たのです。
「！”＃＄％＆！””％＆'（）＆＆％”％＄＆％＆％'＄＃＃！
＄＄＃＆％＄＃？）（）＆％」

そのまま白目を剥いて気を失ってしまいました。

ハーレムの宴（前書き）

以前書いたものの改定版です。

ハーレムの宴

綾子の割礼　プロローグ（改定）
ここは砂漠のにある王国のオアシスなる居城
ここはこの国の国王唯一人のためのハーレム

年若い少年王をもてなす宴の最中である。舞台の上で大勢の女達がわずかばかりの装身具でみを飾り立て淫靡な曲を背景にスッポンポンで卑猥な踊りを踊っていた。
女達は全員ハーレムの奴隷だある。まだ生理がきて間もない可愛らしい少女からなんともいえない色気のある熟女までいる。
しかし女として一番隠さないといけない大切な場所である、“おまんこ„にはパンティなど着けてはおらず。をこれ見よがしに見せている。そして性器を隠す最終防衛ラインである陰毛は誰一人生やしている者はいない。手入れをしてりるのではない。二度と生えないようにされたのだ。

それだけでない一人一人に違う刺青が“おまんこ„を中心にされている。草木、花、虫、動物、幾何学模様、鳥、その他・・・
だがそれだけではない奴隷女たち全員が陰核と小陰唇を切られているのだ。
これはこの国の成人通過儀礼であり国王はクリトリスのある女に種付けを禁じられているのだ。
男は精通がきたらペニスの皮を切られるのと同じだ
女は生理がクルと陰核・小陰唇を切除し陰門を封鎖する。だが奴隷は貞操の心配はないので奴隷の証しとして刺青をする。
様々な人種民族がいるその中に２０代半から３０代前半の日本人の

女がいた。いずれ劣らぬ女奴隷達の中でも飛びぬけて美しい奴隷女である。
黒い絹のような長い髪をポニーテールのようにしている。憂いのある二重まぶたをもち、清楚な顔だちは大和撫子と呼ぶに相応しい。
だがそのボディはとても大和撫子と呼ぶには相応しくない実に限度を超えたけしからぬものである。爆乳と呼ぶほかない巨大な乳房は何の支えもないのにつんと上を向いているお椀方だ。乳りんは狭く乳首もそこそこ。腹回りがぐっと引き締まっている。お尻はら太腿にっけてはたくましいとさえ言える。脚は東洋人離れした長く細いカモシカのようだ。
３人の娘の母には見えない。

国王に見せる為のベリーダンスやシンクロナイズドスイミングの猛稽古をつんでいるからである。
筋肉質だが、けしてゴツイ感じをさせない。女らしい曲線を維持できるのは日々食卓に上る高カロリーな食事のおかげであろう。
そしてこの女奴隷の股座には紫色の牡丹の花が刺青されている。そしてこの奴隷もまたクリトリスもラビアも切り取られている。

この刺青になぞらえて『紫牡丹』様
とか“紫のお姉さま„呼ばれている。
いまのハーレムで一番国王の夜伽を命ぜられる事が多いのだ。
彼女は昔日本で専業主婦をしていた。優しい夫と3人の娘そして大勢のメイド達囲まれていたその時は『綾子』とよばれていた。
だが彼女は夫を失い娘達やメイドさん達と共にハーレムの女奴隷だ

しかもクリトリスとラビアを切除され刺青を性器に彫られるという
屈辱。

この大勢の女奴隷達に共通する
未来を映さない虚ろな瞳をし自分で考える事を放棄した者だけが出
せる底なしの無垢な笑顔をした彼女の悲劇を話しよう。

ラーディアの割礼された時の回想

ラーディアの割礼

「この娘は私とは少し違います。この娘は元々奴隷階級の出なので割礼はうけられません。この娘が割礼を受けたのはまだ最近です。王宮で下働きをする為に私と同じ時期につれてこられたたのですが……。」

恵美「それはそうとルーンさん、あの御着物を着られたほうがよろしいかと…」

顔を赤らめて言った。ルーンもラーディアも完全にスッポンポンで女の大事な所を丸出しであぐらをかいて話し込んでいたのだ。

「あらあら、出しっぱなしでしたね、話に熱中して忘れてしまいましたわ。でも問題ありませんわ」

ふたりとも全裸のままだ。

「どうもパンツを穿いてると蒸れる様だし気持ち悪いですから嫌です。王宮では私たち奴隷の女は全裸でしたし腰布をつけることもありますが下はノーパンでしたし公式の場では私たちは全裸が正装でしたから」そう言って嫌がった。

「それにどの道、メイド服に着替えたら規則でパンティを脱いでノーパンにならないといけませんし・・・」

「そ、そ、それは着物だから…着物はパンツを穿かない事になっていますから…。

それに学校に行くときはパンツを穿いています。女の子なんだから

大事な所はちゃんと隠してください。」
「そうですよ、帰ってきたのだから外出着からメイドの制服にきがえませんと」
彼女達の制服はよくある洋風のものではなく。紺色の着物である。タスキがけをして白いフリルの付いたエプロンにヘッドドレス。しかし下半身は超ミニスカート状態であり腰骨までスリットが入っている。靴下も足袋も履いていない1年中基本的に裸足のままである。着替えたルーンとラーディァ
「それなら心配なさらなくても大丈夫です。私達のここはもう色色な人達に隅々まで見られてますからもう隠す意味もありません。」そういうとルーンは立ち上がり恵美の前に腰をグッと突き出し割礼済みの性器を目の前にだす。そして腰を淫らにくねらせる。

「ついこの間までそういったお店でこうやって裸で踊っていたし夜のお相手もしてたんだから」
ラーディアも言う「慣れだよ世慣れ！奴隷市場で初めて人前で全裸にされて競にかけられた時は本当に死にたくなった。でも今は自由民になれたしそれに癖になっちゃた」
「………・御免なさい…・。」

「いいのですよ。私も女の子ですからね。男の子なんてめじゃないくらいのドスケベなんですよ！皆さんと同じで気持ちのいい事は大好きですから。」とペルシャ系の超美少女はニヤリと笑った。
「わたし達はスケベなんかじゃありません」という抗議の声が上がった。しかしルーンは「ほんとに?？」と、くすくす笑う、皆だまる。彼女達の愛する女主人綾子。彼女に抱かれハシタナイ声を上げ

て女同士で愛し合う悦びを教えられた。メイド達は全員下着をつける事を禁じられているので太腿と畳を濡らす事になった。
「で、でもぉ、クリトリスを取っちゃったらもう気持ちよくなれないんじゃないの？」
と誰かが声を上げた。
「そうですね、奴隷の男の子の中には罰としてや、女部屋で使う為だったりしておちんちんを取ってしまう子がいたけどもう駄目でしたね。」
全員絶句「な、なんて残酷な・・・」恵美は言った。（まだ一度も見たことのない）男の子の一番大事な所を取ってしまうなんて・・・。

「けど女はまだ穴が残っていますし性感も有るんです、もちろんクリトリスが有った時とは比べ物にならないくらい鈍感になってしまいますが本当にわずかですがイク事も出来るんですよ。」
「いけるんですか？」
これには恵美たちも驚いたようだ

「ええ、ですが本当に稀です。夜伽はそれなりに気持ち良いですけど、まぁ、ほとんどの場合男の人が終わるのを待っているだけですけど。だからおちんちんの大きい方が喜ばれましたね、でもそんな方は多くないですから色んな技が作られました。」
そういうとルーンは恵美の手を取り一指し指を己の膣に入れた。
恵美は驚きあわてたが次の瞬間、眼を見張った自分の人差し指がが膣壁にものすごい力で押されているのだ。
「これが“締め手„とよばれる娼婦の技ですわ
陰核を無くした為大きいおちんちんを望んでいるのですがそんな人はめったにいません。
性の喜びを得ようとする女の執念が生んだ技ですわ。」

「話がずれてしまいましたわね。ラーディアさんが割礼をなされたのは実はまだ最近です。日本に行くのが決った時ですから国の最有力者の奥様に差し出す女官が割礼を受けていないのは駄目だというので後宮内で儀式を施してもらったのです。後宮の女性達は大変悲しまれたようです。」

「なぜです？」

「それは後宮には幼い少女から年頃の娘そして熟所が沢山おりますがそれなのに陛下はもうお歳でしかも糖尿病で夜のお勤めは無理だそうです。彼女達は私達下級の女官みたいに自由に外に出られませんし、後宮には陛下以外の男性はいません。いたとしたら宦官の人たちで、中にはタマタマだけとっておちんちんは残っている人も極稀にいるんですけどしたら死刑なので女同士で慰めあうのが黙認さています。ですから皆さんレズビアンに熱中しています。
なかには張り方のついてる矢を弓で撃っておま〇こに入れるなんてのもありましたね。
もっとも禁止されていて見つかれば凄い御仕置きがまっていますが」

「私達は夜は王宮のお客様やお店で男性のお相手をして昼は後宮のお姉さま達をお慰めしていました。
男性がいない世界でしかもある程度の太さがあって長いものは持ち込めないようになっているので、
この娘の様な普通、割礼を許されない卑しい身分で特別な身体をしていた者が後宮の女達に重宝がられるのです。」

「それはね、僕のクリトリスがまるで男の子のおちんちん並の大きさがあったからだよ

そういう娘は天人花（マートル）と呼ばれてすごく可愛がってもらえるの、そりゃそうだよね突っ込むものがそれしかないんだから。

「この天人花がいない世代のハーレムでは、処女のまま、もしくは非処女で後宮に入ってもセカンド・バージンで一生過ごす者も少なくなかったそうですよ。どうです皆さんも一生処女を護っていきませんか」と冗談めかしてルーンは言った

全員扇風機の様に横に振った冗談ではないという顔をしていた。

「僕はあのおっきなクリトリスで一度も夜伽に呼ばれずに中年になって本来一生処女で過ごすはずだったおばさん達の処女を奪ってあげたんだ。もう腰が抜けるかと思うほど。お店でも他の女の子達を犯すショーをしてたんだ。それに…・」
顔を朱に染めたラーディアはルーンの手を握り
「ルーン様とは寝起きとお店から帰ってから激しく愛し合っていたから。
H三昧の日々だったんだ。でも王宮の命令で割礼を受けないといけない事になって本当に辛かった。
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

回想
割礼を明日に控えラーディアは去勢刑前夜の少年の様に不安に慄いていた。
ルーンはその事を心得、彼女の恐怖を和らげ慰めようと心に決めていた
この当時の2人は今と違いラーディアが日常もベッドの中でも主導権を握っていた
理由はいくつもあった。彼女にとってラーディアは女同士だからこそのテクニックで時たまではあるがいかせる事があった

それと男根にに たクリトリスがこの男尊女卑の文化の中でラーディアに男の子になったような精神を持たせた。外出の時は男装していたし王宮内での口もとに薄いベール上半身はブラジャーだけで下は長めの腰布という女性的な服装を嫌っていた男より女の方が好きでお店でもそういう趣味の女性客がついていた。

そんなこんなでルーンは性の奴隷と化していた
ラーディアが割礼の儀式を施してもらっているころには
ルーンもまた闇医者の手で陰部を封鎖してもらっているだろう。
建前上、王宮のというよりこの国の奴隷以外の未婚の女性は全員性器は封鎖されている事になっている。

ルーンは下着の腰巻一枚でラーディアの前にひざまずき
「ラーディア様、どうか今日は私めの奉仕をお受けくださいませ。」
そういうとラーディアのベール・ブラを取り去り可愛らしい唇をあらわにし１４歳とは思えないボリュームのある褐色の乳房があらわれた。
腰帯を解き長いスカートと下着の腰巻を取り去った。淡いチョコレート色の筋肉質なお尻とカモシカのような脚が現れた。そして目の前にはもう見慣れたおまん◯である。
ベッドに座ったラーディアの脚の間に入り巨大クリトリスを嘗め回し勃起させた
ルーンは自らも腰巻を解き既に割礼済みの性器を露にした。
「ラーディア様、横になってください。」
横になったラーディアにルーンは脚を開いて覆い被さった。
開脚と同時に股間に刻み込まれた蝶の刺青が羽を開いていくのがな

んとも淫靡だ
ルーンはいとおしそうにそれをなでて。
「あぁぁ、私の純潔を捧げた亡き夫のおチンチンを思い出しますわ。あの人は日本人だったのでおチンチンの大きさはこの位でしたわ。あの人は毎日何度も愛してくれた。朝も起きたら直ぐお布団で夕方はお風呂場で、時には待ちきれなくて玄関で。お食事の後はもう気を失うまで愛してくれた。」
ルーンは騎乗位でラーディアの長大な陰核を自らの膣に入れていった。
そして自らの巨乳をモミしだきながら腰を動かしベリーダンスを開始する。
「あぁぁぁ！ぐ、くぅぅうー！あーーーん！あっ！あぅ！あ、あ、あ、き、気持ちいいよー、気持ちいいよー、ルーン気持ちよすぎて僕、変になっちゃう。
こんなぁ、いいものぉ、とるなんてぇ、嫌だー。」
「割礼はぁ、女の誇りぃ、…ですわ…、はぁはぁ、男の子…みたいな…貴女、はぁぁん。もきっと割礼すればぁ、…・おしとやかな女の子になれますわ。くぅー、」

「そ、そ、んな、あっあっあーーーーーーーー。」早くもラーディアは絶頂に達してしまった
2人は抱き合ったまましばらく呼吸を整えていたが離れてそしてお互いを抱きしめあい熱い口ずけを交わす。しばらくするとラーディアの陰核がまた勃起した。
「ねぇルーン、またいいかな。」
「………はい。」顔を紅くして答えた
今度はラーディアが上になり正上位の形だ。ラーディアは激しく攻め立てる。
だがラーディアはせつなげに「ルーンなんで僕にはタママが無い

の？

ねぇなんで？僕、なんで男の子じゃないの？ねぇなんで“あたし”は女の子なの？

男の子ならおチンチンの皮を切られるだけですんだのに」

ラーディアは陰核を切り取られる恐怖から泣いていた。

しかし反面。文化的な精神は割礼を受けられる喜びも感じていた。

割礼を受けていないものは人にあらず。人間としてあつかってもらえるかもしれない。

ルーンはただ黙って優しく彼女を見つめていた。

その晩２人は６回も愛し合った。

翌日、日没後割礼を受ける為ラーディアは割礼の儀式専用の建物に引き立てられた。

ラーディアはすでに嗚咽を上げて泣いていた

オイルランプで広い部屋の中が照らされ幻想的な雰囲気が漂っていた

既に割礼の巫女を務める１０人以上の女達は一糸纏わぬ全裸で待っていた。

部屋に入るや否やラーディアは全裸にされ股間を丁寧に消毒された。

ここにいる女達は王宮では珍しくも無いが陰毛を永久脱毛処理され童女の様につるつるである。割礼も済ませているし膣の奥のほうを糸で縫いあわせているので恥丘には陰核と小陰唇が無いだけで縫い目は見えないし平民以上なので性器に刺青もされていない

ラーでぃぁは１４歳だが陰毛が生える気配は無い。割礼が済めば平民と変わらないが奴隷階級であることを示す為に後で性器に紅い薔薇刺青を彫られるのだ。

貴族の娘達が彼女の割礼を見学に何人か来ていた。娘達もしきたりにより全裸である。

「あの娘、日本の綾子様の所に貢ぎ物として送られる奴隷ですってね。」

「綾子様が旦那様に大切にされていから贈り物をするのはいいですけど。わざわざ卑しい奴隷娘に神聖な割礼をすることは無いでしょうに。」

「それに夜な夜な怪しげな店で男に身体を売っていたらしいとの噂ですわよ。その様な者を綾子様に差し出すなんて失礼ではないの？やはり奴隷を貢物にする時は昔から少年奴隷なら童貞のうちに去勢して、女奴隷は処女と決ってるのに。」

「やはり守旧派の方達には綾子様はかなり評判がお悪いようですよ。やはりあの旦那様が彩子様に割礼を受けさせておられないからではありませんか？なんでも何度も割礼をさせる為に人を送っても追いかえされているようですよ」

そう彩子はまったくきずいていないが何度と無く割礼されそうになっていた。しかしながら旦那様や先代の社長で亡くなった旦那様の父親が手を回して防いでくれていたのだ。

会社同士の利益の為の政略結婚とはいえ何も知らない少女に割礼をするのは忍びなかった。それに文化の違う日本での営業活動は出来なくなる。そういった打算もある。しかし後に彩子が割礼で自らクリトリスを切り落とした事がどういった経緯で伝わったのか分からないが美談になり日本中に割礼の習慣が広まる事になった。

腹と太ももに出血を防ぐ為帯で縛られ台座に寝かされたそして数人がかりで押さえつけられた。長い脚が大きく広げられる

泣き叫ぶ彼女の陰核はチジミ上がり皮の中に覆われていた。それをつまみ上げ根元にメスが入れられた。一気にメスがすべった。
「グゥャァァァァァァーーーーーーーーー」
建物中に響く少女の悲鳴。今まで何１０人もの女達をよがらせてきた物があっけなく切り取られた。性器が流れ出た血で赤く染まる。それも気にした様子も無くラビアにもメスが入れられ切り取られていく。身分の高い少女なら服を脱いで裸になる事まで儀式ばって行なわれるが奴隷娘ではこれがいいところである。
股間に包帯が巻かれた。褐色の肌と白い包帯のコントラストが痛々しい。そして少し血がにじむ。
ラーディアは“大人の女„になったのである。

ルーンとラーディアの傷が完治していよいよ日本に行くその朝に二人は部屋で全裸で立ったまま抱き合い熱い口ずけを交わしていた。
二人のビーナスの丘は奴隷女の証である刺青が施され割れ目は綺麗に縫合されていた
ラーディアはもう２度と女の中に入り込む事は出来ないのだ。
その事が２人の関係を変えた。ラーディアはルーンに対して従順になっていた。
彼女にとって巨大な陰核は自分を男と錯覚させていた。それが切り落とされた為にそれまでの男らしさのよりどころを失ったのだ。それでも、もともと女なので去勢された奴隷少年に比べれば遥かに元気で明るい。

『ラーディア様おわかりですね？ではじめましょう』
「はい」
「わたくしの蜜をお飲みなさい」
艶然と微笑むルーン、ラーディアは涙目でルーンの股間に顔を埋めた。

噴出すルーンの尿、ラーディアは舌を出してそれを飲んだ。
これは今までの2人の関係。主人と性奴隷の関係を逆転させる為には避けて通れない儀式だった。
尿を出し終えたルーンは「ラーディア、今日から私が貴女の主人です。」

「こんな所ですわ」
そうルーンが言ったが恵美は軽いパニック状態。それ以外のメイド達はドン引きである。
最後の話が余分だったようだ。調子に乗って話してルーンは少し後悔した。

三々五々散っていったが屋敷中その事で話は持ちきりだった。

夜、大浴場にて。
大勢の娘たちが入浴していた。そんな中に湯船でくつろぐ貞操帯を外してもらったさやかとパニックから脱した恵美がいた。
「そんなことがあったんだ。」
「さやかさん、もう私パニックになってしまいました。本当に世界はひろいでうわねぇ。ところで貴女いらっしゃらなかったようだけどどなさっていたの？」
割礼というものに強い怒りを感じていたさやかがいなかった事できになっていた。
「あっ、うん割礼の話なんて聞きたくないからね。剣術の稽古をしていたんだよ。毎晩彩子様の夜伽に呼ばれる娘の世話をするんで彩子様の部屋の隣に控えていたからもう頭が変になりそうだったよ。自分でできないし。

以下は割礼の儀式を直前に控えているかって『恵美』と呼ばれていた女奴隷の一匹が友人の陰核包皮切除を思い出した時の心の中です。

「ある日から美希ちゃんの様子が変りました。何時も顔が紅く呼吸もあらくなり。歩き方も変でした。

脚の間からいやらしい液がたれていました。こうなったのは彼女の陰核を包む皮をルーンさん達に切り取られたからです。この時は美希ちゃん個人の問題でした。

ですが私を含め全員の問題だったのです。

この時何か対策を立てておけばこんな事にならずにすんだのかもしれません。

私は今、全裸の『割礼を司る巫女』さん達に手を引かれ、神殿に連れて来られました。

私は着物を脱がされ、生まれたままの姿にされようとしています。

もうただの奴隷でしかない私は逃げられません。陰核とラビアにお別れを言うときがきたようです。さようなら私の『性』春』

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

屋敷の一室、エキゾチックな音楽が流れる

蝋燭の芯がじりじりと音を立てて、暗赤色の炎を揺らめかす

その暗くよどんだ光は障子に腰をくねらせ淫靡な踊りを踊るラーデ

ィアの褐色の全裸のシルエットを浮かび上がらせた。
踊りをやめラーディアは
「美希さん、おめでとう。割礼をするからね」
こちらも全裸で刃物を研いでいたルーンも
「そうですよ、日本人の貴女を私達のおまんこみたい出来るのですから」
「はい、」全裸の美希はうれしそうに答えた。
美希は2人が陰部開放の手術で入院していて付き添いをしていた時から自分も2人の様に割礼でクリトリスとラビアを切ってほしいと頼み込んでいた。ルーン達は割礼に対する理解者が増えた事を悦んでいた。

ルーン達は日本の女性達が割礼をしていない事が文化の違いと言う事で納得はしていたが、未だに信じられずにいた「陰核をつけたままにしておくなんて…」
「では、まいります。まずは陰核の皮か切ります。」ピンセットを持ったルーンの手が美希のまだ男を知らない性器に伸びる。
陰核を包む皮が捲られナイフが入れられた。ぷっん！包皮が切り取られると同時に美希の悲鳴が響いた。
だがこの家は防音設備が悪くあたりに声が響いてどたどたと人がきてしまった。

彩子に見つかりこの割礼は失敗に終わった。その上で美希は入院、割礼済み娘達は出来たばかりの専用の貞操帯をはめられ座敷牢に入れられてしまいました。
そして美希が退院した日。
ルーンとラーディアそして美希は綾子に皆の前でお仕置きすると告げられました。
昔はお嬢様だったが今は世間知らずの奴隷娘のルーン
美人でスタイルと運動神経抜群でも無教養な売春婦でしかないラー

ディア。やはりオッパイとお尻に栄養が行き過ぎか？
可愛いがお頭があまりにも貧弱な美希

３人のお馬鹿娘はこれから受けなければならない体罰の恐怖で泣き出してしまいました。
美希もまたしかり。可愛いロリータ顔を涙でくしゃくしゃにしてツルペタボディを震わせています

３人の娘はそれはそれはきつい御仕置きを受けました。

まず３人はお尻をさんざん叩かれました。
ふだんお尻を叩かれるのとワケが違います。
このお屋敷にいれば尻叩きなど日常茶飯事です。メイド頭の青葉に一人が粗相をした罰に連帯責任で班のメイド娘全員が四つんばいになり若い生尻を突き出して竹竿でバシバシたたかれるのです。
そしてメイド達の粗相多いと監督責任として青葉が綾子によりお尻を叩かれます。

しかし今回はことが事だけに女主人綾子の手により馬鹿娘３人のお尻は
鞭で叩かれました。

「まずルーンさんからお仕置きです！！準備をなさい！！」
「は、はい・・・」ルーンは怯えた声で四つんばいになりミニスカートの様な着物をめくりあげる。勿論和服なのでパンティなどはいていない。
そしてメイド隊に押さえつけられる。
ルーンのお尻は大きすぎず小さすぎずそしてぬけるように白い形の良い美尻だ。今度恵美と美尻比べなどしてみようと綾子は考えた。

鞭は振り下ろされた。ぱしぃ
「痛いー」
「悪い娘！悪い娘！悪い娘！」
パシュパシュという風きり音と共に鞭が何度も何度もルーンの尻に
打ち付けられる。
白い皮膚が裂け血が染み出す。
ラーディアは眼をそむける。「何を眼をそむけているのですか次は
貴女の番ですのよ！？」
綾子は鞭打ちをやめたそして「ラーディアさん準備なさい」ラーデ
ィアは泣き叫びながら逃げた。「も、もうイヤー痛いのされるのは
いやー」
以前王宮にいたときも出来の悪いラーディアは御仕置きをされてい
ました。
その記憶がよみがえります。
大きな身体を震わせています。
取り押さえられしりを天に向かって突き上げれる。
鞭が振り下ろされるたびにラーディアの悲鳴が響く。
「もうしませんだからもう許して～」

陰核が有った頃の綾子の性生活　その1

わたくしは『紫牡丹』広大な砂漠のどこかにある巨大なオアシスに建てられたハーレムに集められた女奴隷の一匹でございます。

わたくしと3人の愛娘達そしてわたくしに仕えてくれた愛するメイド達は捕らえられここに幽閉され、名前を奪われました。そしてついには、女の一番大切な所に《割礼》と言う儀式をされてしまいました。クリトリスとラビアを切り取られてしまいましたそれにより永遠に女の悦びを失ってしまいました。

外からの情報はあまり有りません。時計もカレンダーもありません。いったい今が何時なのかすらわかりません。ですが分かっていることがございます。それは
もう二度と日本に帰ることは無いという事でございます。

これから皆様にお話しするのは、わたくしがまだ『紫牡丹』と呼ばれるハーレムの女奴隷＝人語を解する生殖用家畜になる前、
そして［割礼の儀式］によってクリトリスとラビアを切除される前のこと。
まだ『綾子』という名前を持ち、亡き夫、つまり今わたくしがお仕えするご主人様（国王陛下）の前のご主人様以外の殿方は知らず
股間にある女性自身にまだ大粒の陰核と小陰唇をぶら下げていた、
まだ一人の女であった時のお話です。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～～～

その当時私は大きな日本のお屋敷に住んでおりました。

夫を、ご主人様を亡くし女盛りの燃え上がるような激しい性欲の為一人寝に耐えられず。かと言って結婚するまで、そして結婚後しばらくの間、生娘のままであったわたくしは処女を捧げた方以外の男性のおちんちんを受け入れる気にはなりませんでした。

奴隷になり何処へ行っても裸かそれ同然のいでたちですが、この頃はわたくしは二度と殿方の目の前で裸になる事。ましてや大事な所におちんちんを受け入れる事はもうは無いとばかり思っておりました。

しかもわたくしは生前の夫＝ご主人様から手淫を硬く禁じられておりました。それなので長年女をやっておりますが夫＝ご主人様の命令でした時以外一度も手淫の経験はございません。
前のご主人様を失い悲しみと喪失感よりも身体の奥からこみ上げて来る。原始的な欲望のほうがわたくしを苦しめました。
生前、夫＝ご主人様はとにかくエッチな方でした。結婚まで童貞を守るためにお義母さまにより鎖陰されておりました。
わたくし以外の女は知らない方でしたので思いつくままイヤラシイ命令や悪戯などしました。

その為でしょうこんな助平女になってしまったのは・・・・。

毎日朝晩必ずわたくしの身体を求めてきた夫はもういない。
かといって手淫は出来ない。
ココロは涙を流しています。身体・・・女の大事な所からはとめどなく愛液が流れ続けています。そのころは着物で生活していたのでパンティなどという無粋な舶来物は着けておりませんでした。ただ今のハーレムでの暮らしはブラジャーと腰布一枚口元を隠す薄いベールが基本。全裸かそれに近い格好ですので何時もノーパンです。

なんのはずみでしょう？わたくしはメイドの一人で青葉と言う娘をてごめにしてしまったのです。魔がさしたとしかいえません。

寝室に呼びつけエプロンを取らせ押し倒してから着物の帯をくるくると独楽のように回転させました。
着物がはだけ襦袢も取り除き一糸纏わぬ姿にしてしまいました。
この屋敷のメイドは全員忠誠の証としてわきの下と大事な所の毛を永久脱毛する決まりがあります。勿論わたくしも昔はただのメイドの一人でしたのでワキもアソコもツルツルです。

驚いたのは彼女がまったく抵抗しなかったことでした。
それどころか青葉は「う、うれしです綾子様・・・私を綾子様のものしていただけるのですね？好きです。好きです。心からおしたい申し上げております。」
もうたまりませんでした。理性はどこかに消えてしまいました。

わたくしは青葉の若しい身体にむしゃぶりつきました。
唇をむさぼりあい
大きく張りのあるおっぱいをもみしだきピンク色の乳首を嘗めまわしました。
お互いのおっぱいをこすり合わせました。
そしてわたくしは青葉に言いました。
「青葉、お前の“大事な所”を見せておくれ」
そうすると青葉は急に顔を赤らめていやいやしながら両手で股間を覆い
「お、おゆるしください綾子様！せ、せめて明かりを！明かりを消してください、おっ、おねがいです！」
「わたくしのことが好きなんでしょう？なんで見せてくれないの？」

「す、好きだからです！好きな人だから恥ずかしいんです」
しかたなくわたくしは彼女の耳元で囁きました。
「お前はわたくしの“奥さん”になるんですよ？夫として奥さんの全部を知らないと」
「わたし・・・」
彼女は静に両脚を広げ性器をわたくしに魅せました。

陰核の有った頃の綾子の性生活　　その2

わたくし達は69の体位を取り。無心にお互いの股間を舐めまわしました。
敏感な陰核を刺激され可愛らしい喘ぎ声が聞こえてきます。そしてわたくしもまた陰核の快感にもだえました。クリトリスを中心に身体全体に広がっていく快感です。

今はもう2度と感じられない感覚です。
これがわたくしが同性の性器に口をつけた初めてでございました。

夫が生きていた頃は毎朝必ず。お元気になった夫のおちんちんにお口で御奉仕するのが妻の務めという決まりでした。わたくしがあの方の奴隷であった時、何回あの苦い白い液体を飲み干した事でしょう。
不味い物なのにおちんちんの先からわたくしの口の中にどろどろの精液が噴射されそれが喉を通っていくときとても幸せでした。子宮の奥底で精液を受けとめるのとは違う喜び。分かち合うのではなく、奉仕する悦び。愛する人に喜んでもらえる喜びでしょう。

わたくしと青葉は毎日悦びを分かち合い与え与えられました。
そして毎朝、青葉は起き抜けにわたくしのクリトリスを舐めるのです。
えっ、何故ですって？
当然の事です。

朝のお口での奉仕をするのは“妻”のつとめですもの（はぁと）

わたくしも旦那さまとして奉仕をうけております。

わたくしがこの砂漠の真ん中のオアシスにある巨大なハレームのなかで今日もこうしていられるのは、青葉・・いえ今はクリトリスもラビアもなく股間に不思議な幾何学模様を掘り込まれ名前は棄てさせられて今は“緑の枝葉”とよばれる女奴隷と夫婦でいるからです。

日本に住んでいた頃から奴隷になっても続している事が2つあります。

一つは朝のお口奉仕。

。王様に見せる為の踊りの練習があります。

普通のベリーダンスなどは青葉達もしますがわたくしは愛妾なので王様に見せる為の特別な踊りの練習があります。

それは女に生まれてきた事を後悔するほどいやらしいものです。それだけ奴隷女であるので人前で全裸になる事などよく有ります。それだけならいいのです。それだけでなく
大勢の人前でしかもわたくしの3人の娘達まで居る前で大事な所やお尻を自らの指で広げての腰フリ踊りなどをさせられると。本当に死にたくなります。
ですが笑顔で踊らないといけません。
そんな傷ついたわたくしを慰めてくれるのが3人の娘達の笑顔。
わたくしの3人の娘達はいいました。

「お母様とってもきれー」　「わたしもお母様みたいな裸の綺麗な大人になりたい」
「王宮にいる男の人たちお母様が裸で踊る姿見てこうふんしてたー」
「お母様が大きなおっぱいをぷるんぷるんいわせると所がさいこーでした」
「わたしたちも何時かお母さまと一緒に今みたいにおどるのよね？まいどおしなー」

そう言ってなぐさめてくれます。まだ初潮もこない子供に・・・・。

そして踊りの練習のあ後にわたくしは週に1度くらい最も辛い作業があります。
それはわたくし達ハーレムの女の最大の仕事『子作り』です。
愛してもいない人との子供を作らないといけません。
生涯男性は夫だけと心に決めていたのに・・・
しかも踊りの練習同様3人の娘達が見守る中でです。「お母さんこれから王様と二人で彼方達に可愛い弟か妹を作ってあげるからね。」
わたくしは裸でベッドの前で三つ指付いて娘達よりすこし年上の王様を迎えます。

まだ精通がきて間もない男の子である陛下は獣のようにわたくしを攻め立てます。
亡き夫のおちんちんこそ世界一だと思っていました。ですが陛下の方がはるかにご立派でした。後で知ったのですが夫のおちんちんはそれほど大きい物ではないのだそうですし、割礼をしていなかったので仮性包茎というものだそうです。
陛下は割礼をしていたのでおちんちんに余計な皮はありません。
それでわたくしのおまんこをついてついて突きまくるのです。荒々しい腰ずかいです。
クリトリスを失い感度が極端に鈍くなってしまったわたくしもまっ

たく快感が無いわけではありませんし性欲も人並みにあります。わたくしの“おまんこ”は若い男のおちんちんをくわえ込んだせいでしょうか、主人の意思に反して全身に快楽を伝達します。

子供達の前で痴態を見せまいとする母としての精神が快楽を得たい男日照りの欲求不満の女としての精神につぶされてしまいます。
わたくしは両手を陛下を抱きしめ両脚を陛下の腰の上で交差させたうえで自らの腰を激しく振ってしまいます。「む、紫牡丹、す、好きだ！大好きだよぉ。」
この少年王をわたくしは世界で一番憎いとおもっているのに・・・なぜか変な気分になり「わ、わたくしもです、陛下！陛下！愛してをります！よい子をっ！よい子を沢山、たくさん作りましょう」そう叫び陛下の唇をむさぼります。
「うむ、出すぞ、余の子を生んでくれ」
「どうぞお出しくださいませ陛下あぁぁ～～」
陛下は顔をしかめ呼吸が止まります。
「ぐあぁっ」陛下が呻かれました。わたくしのオマンコのなかで陛下のおちんちんが振るえます。そして亀頭の先から大量の精液がわたくしの中に噴射されます。
「あぁ熱い～」
～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～～～～～～～～～～～～
そのあと陛下としばらく歓談して陛下はわたくしの下腹部をなでて「子が出来ているとよいな」と笑顔でおっしゃりました。そういうとまた別の女奴隷との子つくりの為別のお部屋に。
残された私達は。
陰核のないわたくしの身体はいくことが出来ず。蛇の生殺しのような状態です。性欲は炎のように燃え盛っております。
３人の娘達は幼いながら欲情してをります。安心させる為に「３人ともお父様とお母さまが先ほど陛下としたことと同じ事をして生ま

れてきたのよ。それでね貴女たちも大人になったらねお母さまとおなじ陛下のお嫁さんになって赤ちゃんをうむのよ」

「はい」×3

3人は答えました。

～～

こうして踊りや子作りで疲れて部屋に戻ると青葉がとわたくしがただの専業主婦だったころ夫にしたように

三つ指突いて

『裸エプロン』で迎えしてくれます。もう一つがこれです。

「お帰りなさいませ旦那様。ごはんにしますか？お風呂にしますか？それとも・・・」

「私になさいますか？」

わたくしはもちろん・・・・

陰核の有った頃の綾子の性生活　その２（後書き）

なんか今の綾子の話になっちゃいました。

ラーディアの虚しい手淫

艶のあるミルクチョコレート色の肌をした少女・・・可愛らしいアラビア娘のラーディアは奴隷の娘として生まれた。そして今は日本のある家でメイドをしている。
彼女は
空き部屋の前でキョロキョロと周りを見回した。
彼女は紺の着物の下に１４歳という年齢が信じられないほどの巨乳と細い腰周りそして切れのある大きいお尻していてる。着物には不向きな体型だ。
白いフリルの付いたエプロン。長い漆黒の髪をポーニーーテールに纏めてヘッドドレスをつけてた和風のメイド姿だ。
。

そしてぱっちりした黒い瞳。人種的にはアラビア系だが少しペルシャ系なども入っているようだし先祖には黒人もいたかもしれない。お辞儀をすればお尻が丸見えになるようにデザインされたスリットの入ったミニスカート状の着物からカモシカのような素足が伸びている。
物音を立てないように障子を開けてそっと中にはいる。
誰もいない和室、

ラーディアは期待に胸を膨らませていた。
数ヶ月ぶりの性感。
割礼前にルーンと寝て以来まったく無縁である。
以前は売れっ娘の舞姫であり高級娼婦であった。
娼婦館ではルーンに次ぐ人気だった。
ご自慢の巨大クリトリスを切り取られて以来

ずっとご無沙汰だった。

下半身のミニスカートのように短い。しかも作業用に横にスリットの入った着物を合わせ目を開いた。
そこには本来下半身を守る為の下着はなかった。

お屋敷のメイド達は女主人、綾子の「お着物にブラジャーやパンティ等という西洋かぶれのものを着けるなどもってのほかです。」という言葉に従いいつでも着物時はノーブラ・ノーパンで過ごしていた。日本人の少女達はなれるまで時間がかかり大変だったが、ラーディアは後宮にいた頃はほぼ全裸で生活していたので気にはならなかった。

彩子や青葉に見つからないよう一人で自慰にふけった。
もし見つかれば厳しい御仕置きを受けなければならない。少し前に美希に割礼をしようとして見つかり。泣いて彩子に許しをこうたが相手にされず皆の前で着物を脱いで全裸になるよう命じられた。その恥辱と御仕置きの苦痛に可愛いらしい顔を歪めて泣き叫ぶ事になった。

だが割礼の儀式で陰核と小陰唇を切除され薔薇の刺青を彫られた性器は極端に感度が鈍っている。
オナニーをしていた彼女は悲嘆にくれていた。かつて少年の自慰の様に巨大な陰核をしごきたてれば快楽ノ園にたどり着けたのに今はむなしいだけ。
　それればかりではない陰核と小陰唇を失ってなお彼女の脳は陰核に対応する部分はしっかり残っているのだ。幻痛とか言われるものだ。

事故等で脚等を失っているにもかかわらず無いはずのところが痒くなるなどの現象である。
それは陰核でも同じである。彼女の脳内では陰核は隆々と少年の陰茎のように勃起して快楽を求めているのだ。だが現実の世界ではその部分は割礼で失われている
「無いよぉ～、無いよぉ～」普段の元気なところは無く弱弱しい声で股間を弄り回す。

彩子の怒りがとけて貞操帯を外してもらったこの間の晩、双頭の張り方パンツを穿いた彩子に抱かれたが結局いけなかった。割礼以来、数ヶ月ぶりの性交だったのにもかかわらずだ。愛するルーン・アルナーグにより処女を奪われ
ハーレムや夜のお店でＳＥＸの楽しみを覚え始めたばかりの若い娘が性器を閉じられて自慰もできなかったのだ。あり余る性欲を発散できずモンモンとしていたので、楽しみにしていたのに…。
ラーディアは自分股間にいかに残酷な事が行なわれたか思い知らされたのだ。

陰核を失った女の性生活

この間の夜、彩子、ルーン、美希の３人で乱交を楽しんだ、いや楽しめたのは日本人２人だけであった。ルーンは結局生殺しであった。全裸の彩子は同じく全裸の美希の両脚を大きく広げて股間を嘗め回していた。だが、包皮の無い陰核には触れないようにしていた。
「綾子様ぁぁ！お願い！何時もみたいにクリちゃんをなめてぇぇ。」
「あら、なんで？これいらないんでしょ？だからルーンさんに取ってもらおうとしたんでしょ？そんな自分勝手な娘はゆしてあげませんｎ。今晩はいかせてなんてあげません。」

「そ、そん、な、あたし変に、・・なっちゃう、よぉ。」
「美希・・お、おばか、さん、、に、なっちゃうぅぅ、」
美希は四つんばいにされ消毒された肛門を舐められている。
「あら、もう貴女はりっぱな御馬鹿さんよ、だって自分でクリトリスをちょん切ろうとするんですもの。」
「えーん、だってあたしアラビアンナイトとか凄く好きで、それで、それで。あれに出てくるお姫様てあっはーん。クリトリス無いんでしょう？
それで出来心だったんですぅ。」
彩子は美希の貧相な乳房をあいぶしながら。
「出来心ですめば警察は要りませんわ。」
そばに全裸で控えているルーン。
ルーンは目をそらした。さすがにばつが悪かった。

既に彩子の手で着物を脱がされそのな裸体を晒していた。身に着けている物はメイドの証とも言えるヘッドドレスだけだ。

若々しい身体は蝋燭の火で照らされて幻想的にみえる。純日本間でペルシャ系の金髪、碧眼白い肌１０台半ばとは思えない、グラマラスな肢体はこれから彩子の舌で嘗め回され手でいじりまわされ隅々まで鑑賞されるのだ。

奴隷娘のルーンは身体を売っていたとはいえ。貞操を重んじる文化で育ったのだ。ＳＥＸの快楽を味える予感もあるが羞恥心でいっぱいであり、目の前の光景とあわせ顔を朱に染めている。

紛争のとばっちりで奴隷商人に捕まり奴隷にされ娼館に売られ、本来なら結婚初夜の前に幸せいっぱいの中で処女を守ってきた証である性器を閉じていた糸を抜糸してもらうはずだったのに処女をオークションにかけられてむりやり奪われてしまった。

そんな娼婦として身体を売らされていたとはいえ年頃の娘である。だがルーンはさほど性の喜びを期待してはいなかった。

陰核を自分で慰めた経験はあるものの数年前に自由民だったころ。まだ穢れを知らぬ処女のうちに陰核も小陰唇も切り取られている。それは彼女達の故郷では当然なのだ。性感帯が極端に鈍く数多くの経験が有るもののイけることは殆どの無かった。

　売れっ子の娼婦だった時ルーンは、自分の貞操を買った男達の様々なペニスをその陰核も小陰唇もない蝶の刺青が彫られた膣に受けいれてきた。大きさ長さ形千差万別だった。大抵男が射精するまでむなしく待っているだけであった。

そして哀れみを感じるほど小さいモノを受け入れた時はまだ良かった。なぜなら何の期待もしないで澄むから

もしかしたら今夜はイケルカモなんて思はなくていい。ただ心静に子宮の奥底に精液を注がれるのを待っていればいい。

なかには徳大サイズものを持つ者もいた初めは期待したしかしルーンのような少女にはただ痛いだけのことが多かった。

豪華な天蓋付きのベッドに全裸で大股を広げて巨大なペニスを突き入れられ美しい瞳から涙を流し「痛い！痛いです許してー壊れ、あ。しまいます。」

その超絶倫の男に一晩攻め立てられ翌朝股間は真っ赤に晴れ上がり血を滴らせていた.

そんな事をルーンは思い出した。

その晩、ルーンは彩子に抱かれた。

乙女の一番大事な所に残酷な儀式を受けた事。もう自分の身体は“女の子に生まれてきた事の喜び”とはもう一生無縁なのだと改めて思った。

陰核を失った女の性生活（後書き）

これで一応一区切りです。第２話『割礼の記憶』　ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ４５３７ｂｒ／１／